



Title	神秘家にして放蕩者 : 両次大戦間のジュリアン・グリーン(1)
Author(s)	原田, 武
Citation	études françaises. 1986, 21, p. 1-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

神秘家にして放蕩者

——兩次大戦間のジュリアン・グリーン (1)——

原 田 武

1924年、『フランスのカトリック信者に反対するパンフレット』を書き終えたジュリアン・グリーンの目の前には、一つの新しい世界がひろがっていた。この微温的なカトリック信者への激越な論難文が、ついに「聖人」たりえない自己に対する怒りといらだたしさの反映であり、彼の「少年期の宗教感情への一種の決別」(『日記』1932年12月26日)⁽¹⁾ としての意味をもつことは、以前にもみた⁽²⁾。この年の夏には「クリスチーナ」が、つづいてのちに『モン・シネール』となる最初の草稿が書かれる。『パンフレット』によって何人かの知己を得たことが作家として身を立てるうえで役立ち、グリーンは比較的順調にスタートを切ったのであった。

世間知らずの、堅苦しい信仰で養われてきたひとりの青年が、『パンフレット』で積もる思いを吐き出したあと、憑きものが落ちたように周囲を見わたす。この世には美しいもの、楽しいものがみちみちており、これらに目を向けないいわれはないのだ。そして何より美しい顔、美しい肉体。人並み外れて強い肉感性をもち、人間のからだ(それも同性のからだ)に抜きがたい執着を覚えるグリーンとして、自己の性癖にいつまでも背くのはとても不可能であった。これからさきしばらく、グリーンにおける「地上の時代」がつづく。

とはいえ、この時期彼がいくら目くるめく地上の歓喜に心を奪われていたにもせよ、もともとグリーンにとって、宗教から完全に自由になることなどありうべくもない。心の奥深くによどんだ宗教意識は、ときとして思

いがけない噴出をみせ、またときに微妙な変容を示す。信仰心の相対的な衰退はおおいがたいとしても、それは何らかの形で存続せざるをえなかったのである。現世の積極的な肯定と根強い宗教意識とのあいだの対立・相剋・葛藤が、この時期を、グリーン全生涯のなかでも際立って多様な、興味ぶかいものとしている。

1

むろん、グリーンにおける地上的なものの目覚めは、この時期にいきなりはじまるのではない。1914年12月の母の死、1916年4月のカトリックへの回心、さらに1917年から19年はじめまでの断続的な軍隊生活、そしてその年の秋から22年夏までつづいたアメリカ留学。グリーンの青年期は、内面的外面的ないくつもの事件でいろどられる。私たちの当面の関心からいって、さしあたり1917年7月からの従軍生活を手始めに、大まかなところで彼の内面の起伏を追って行くことにしよう。若年ながらはじめて祖国アメリカの兵士たちと起居をともにした体験⁽³⁾は、彼にとって学校生活とは違ったまったく新しい世界の発見であるとともに、自分がどんな人間であるかを知る大きな機会であったのだから。

というのも、カトリック信者であり、南部出身であり、女を知らず、おとなしく生まじめなこの青年は、その上パリ生まれの、アメリカを知らないアメリカ人という点、仲間からみてはなはだしく奇異な存在であった。だからといって仲間との関係が格別わるくなかったとは感じられないけれど、このころを扱った回想録『開かれた千の道』を通じて、彼のとまどいようが知られる。いわゆる現実社会を構成する平均的な青年たちにふれて、グリーンという人物の一つの根幹を作っていた少数者の意識、「私は他の人たちのようではない」という気持は、一層の強化を加えられたのであった。

グリーンの従軍生活についていうなら、たとえばドイツ国境の前線では

じめて若い兵士の死体を目撃する場面 (Mille, 893-894)⁽⁴⁾ が当然問題になるけれども (これが母の死につぐ二回目の死との対面であった), 彼にとっての官能の地イタリアでの体験もまた別の意味で重要である。彼は1917年12月から「アメリカ赤十字」に加わり, 北イタリアのトレヴィゾ近辺に滞在する機会を得る。当時の生活のなかで, 翌年の2月か3月, 休暇をもらってはじめてヴェネツィアを訪れた日の感激は, とくに注目する必要がある。その街のまばゆいばかりの美しさに, いたく心を揺すぶられた彼は, 「この世は『イミタチオ』が語るような, いまわしい危険な場所ではないのだ」と叫ぶのである (918)。英文の回想録『幸せな日々の思い出』には, 同じ日のこととして「私が生まれてこの方心に作られてきたあらゆる悲しみの印象が, まるで黒板の字を消すように奇跡的に消し去られた」(179)とさえ語られている。実際, イタリアはグリーンにすれば形而上的な生の苦しみに対立する, 現世の喜びの地なのであって, 彼の感覚の目覚めをうながす事件がいくつもここで起こった。「おそらく一生苦しむことを知らなかった」(66-10-6) 晴れやかな長姉エレオノールの住むジェノヴァへ, 従軍に先立つ1916年に赴いたときには, 彼が「手にした最初の悪書」『デカメロン』を読んで, 「宗教の声をおおいつくすほどの反響」(Partir, 850)を経験している。また同じころ, 姉に連れられて行った知人の家で, 偶然緻密そのものの春画のコレクションに接して, 慄然として未知の世界の前に立ちすくむ思いをしたのも (Partir, 853-854), グリーン青年期の大きな出来事の一つである。

しかし, イタリアを舞台とするこの種の体験としては, おそらく, 1919年9月船でアメリカへ向かう途中, ナポリ寄港の際のナルシス像による衝撃にまさるものはない。ナポリ国立美術館所蔵の, このフェイディアスの作とされる彫像を前に, 「私は人間にとって可能な限り呪縛されてしまった」(Mille, 1028) と彼は語る。それは「おそろしいほどの退廃の力」をほこらかに示し, 「恐怖のまじった歓喜の思い」で彼はこの像に見とれる。

「時間はもう存在しなかった。私は自分が別人に、目を覚まし事情を知った別の人間になっていくのを感じていた」。本来、造型芸術の魅力にことのほか敏感なのが、グリーンの感受性のいちじるしい特性の一つである。幼時に見た「凶報の使者たち」の絵や、ダンテの『地獄編』についてのギュスターヴ・ドレの挿絵につづいて、このナポリの体験が、奥深く強烈なエロスの世界を垣間見る決定的な一步となる。測り知れぬ魅惑を秘めたこの世界から、彼は以後けっして無縁ではいられなくなるのである。

これにつづくアメリカ留学の時代については、やはり、同性愛者としての自己の発見、学友マークへの苦しい愛、そしてハヴロック・エリスの著書によるなまなましい性の現実の開示とつづく、一連の出来事を取り上げるべきであろう。これらは回想録の第三巻『遙かな土地』が詳しく語るところであるが、このうち同性愛者としての自覚については、これが当初ヴェルギリウスに関する大学での講義中に起こったものであること、同性への愛が古代の情熱としてとらえられていたことに注意を払っておくべきだと思われる。同性愛者たる悲しみのなかには、今日の世界に自分の位置はなく、自分は死者によってしか理解されないのだ、との嘆きがまじりこんでいく。そしてこれが「遠くから来た者」、パリ出身のアメリカ人という自己のあり方と結びつくのだ。このころのグリーンには、父祖の地へ来たことの安らぎは薄く、むしろ周囲との違和感に悩んでいたという事情もある。同性愛者の自覚がアメリカで行なわれたのは、意味するところが深い。

ともかく、少数者たる彼の意識にもう一つの意味が付け加わったのである。しかもキリスト教徒としての彼には、自己を素直に古代人として受け入れることができない。キリスト者と古代人とは、おたがいを排除するのであるから。同性愛をめぐる葛藤は、ここからも生じるのであった。

それにしても、これまでうすうす気づいていた自分の傾向に、今日の社会では市民権をもたない、おぞましいレッテルを張られたということ。グリーンは懊悩のほどは、察するに余りある。「もし私が娘たちを好きにな

っていたら、私の人生で何と一切が容易であったことだろうか」(Terre, 1210)。それに彼の場合、これが欲望の問題である以上に、深く美意識にかかわっていたことを考えなければならない。世に倒錯愛といわれるこの欲望の発現形態において、彼にはいささかもゆがんだ欲望という意識はないと感じられる。それどころか、彼が男性にひかれる気持は、基本的に造型芸術に心を打たれる気持と通じあうのであって、そこでは美意識が主導的に働いているのだ。彼がはじめて学友マークに出会ったときの思いは、「天使だ、ぼくは天使を見たのだ」(Terre, 1097)であった。「この愛のなかには、何ら肉的なものはなかった。たぶんこの点にこそ、この事件全体のもっとも奇妙な点があった」。まったく、彼自身がいう通り、「すべてを一言で述べるなら、美が私を荒らしつくしていたのであった」(Terre, 1103)。美意識と欲望との微妙な交錯は、むしろ異性愛においても成り立つであろう。しかし、同性愛の場合これは、公認されていない分だけ悲劇的な様相を示さずにはおかない。これからさき彼の作品をいろどるような、美と恐怖、不安さらには悪との錯綜した結びつきは、人間の美をたたえるというそれ自身無害な、むしろ賞められてよい行為が、同性愛なる反社会的な罪ぶかい性向と入りまじらざるをえない苦しさに根ざしているのである。

ともかく、事情がどんなであれ、男が男を愛するとなれば、これはもう深刻な葛藤なしにはすまない。彼は以後、秘密をかかえた男となる。「これからさき、恥ずべき行ないを隠す人のように、私には隠すべきものがあった。自分では何ら罪があると感じていないだけに、なおさら私にはつらいことであった」(Terre, 1098)。そして、彼の自覚的な「初恋」ともいうべき学友マークへの愛は、実際秘めねばならぬ分だけ深く心に食い入り、その強さ、苦しさからいっても、のちへの影響の深さからいっても、グリーン全生涯の屈指の大きな事件である。これについて、『日記』のあちこちにひんぱんな言及があり、半世紀後においてすら私たちは次のような述

懐を読む。

「私の最初の愛。それは抑えつけられたけれど、いつまでも私の心を食べい荒らす。何をもってしてもその傷がふさがらぬまま、私の最初の愛の上に半世紀が過ぎ去った。そしてこの傷口を通して (por la boca de su herida⁽⁵⁾) 私は全作品のなかで私の絶望の歌を語ったのだ」(70-1-6)。

実際、「彼は私のすべての本のなかにいる」⁽⁶⁾という言葉は少しも誇張ではない。告白の失敗、届かぬ愛といったテーマにはじまり、愛することに伴う誘引と自制、内面化と苦悩など、作中人物がみせる愛の種々相の一つ一つに、マーク体験の変奏を読みとることは容易なのだ。グリーンがマーク相手に示した感情の起伏が、大筋において、その作品世界の基本的な枠組を支えているとさえいえるであろう。

もう一つの、留学時代の終りごろにハヴロック・エリスの性医学書をはじめてひもといたときのショックについては、これがグリーンの心に一種の「開き直り」をうながしたとみることができよう。男女の多岐にわたる性行動を、具体的な「症例」に及んでつぶさに解説したこの本にふれ、彼はジェノヴァでみた春画の男女の奇怪な動作にも納得がいった。このようなとき人間がどんなに異様な、どんなに狂気じみた行為に出るかを知ったのである。むろん、その本には同性愛に関する言及もあったであろう。

たしかに衝撃的な啓示ではあった。しかし、これまでもいくらかは事情を察し、マーク体験も経てきたグリーンにとって、これは人間の包みようのない現実を目を開くための、避けがたい「うながし」であった。人間はこのような存在なのであり、このようなものとして問題を考えなければならないのだ。だがそのことは、彼がこれを合理的に、冷静に受け入れたことを必ずしも意味しない。冷静さ、理性的判断は、もともとグリーンの得意とするところではないのだ。彼本来の熱情性、衝動性にかられて、彼はこのとき「ぼくは別の時代から来た怪物ではない」、「ぼくはもうひとりではない」と叫ぶ (Terre, 1199)。「そのことが私を酔わせた。私は若く、世

界は私のものであった」。こうして宗教は、いっとき重さを失う。1916年の回心以来、彼の心を占め、アメリカ時代にもときどき念頭に浮かんだ修道生活への夢は、これ以後目立って影をひそめる。むろん宗教が完全に彼を離れることはありえないにしても、罪の意識にさいなまれる一方、「人間の美しさが悪魔の作品だなどと、厚かましくも誰が言ってのけたのだろう」(Terre, 1200) と口走る烈しさもまた彼のものであったことを、今後のためにもここで確かめておく必要がある。彼における宗教的なものと現世的なものとのたたかいは、ふつう予想される以上に、強力に、広い振幅のもとで行なわれるのだ。

2

一方、このような感覚世界のひろがり、性的現実の開示と並行して、1924年に先立つ時期、彼の宗教感情がどのような屈折をたどったかをみよう。彼がどれほど宗教にからみつかれてきたかを知ることが、「非宗教化」の重みをつかむための必須の条件であるから。

この点については、1915年、母の死後間もなくふとした偶然からギボンズ枢機卿の著書『わが父たちの信仰』が彼の手に落ち、一挙にカトリック信仰に目覚めたのが、すべての出発点である。「なだれのように、カトリックの教理のことごとくが私のうちに押し寄せてきた。私はすべてを信じた。信じがたいと思えば思えるほど、私はそれを信じたのであった」⁽⁷⁾。1916年4月、正式に英国教会を去ってカトリックに入信したばかりか、その後、ひたすら信仰に打ちこむために、ワイト島のベネディクト派の修道院にこもることを彼は夢想するのであった。「私は天国へ向かって全速力で駆け登りたいと願っていた」(41-5-30)。「私は聖人でありたかった。それがすべてであった」(38-6-23)。「私は15歳だった。私は強く神を信じ、神のために生きることのほか何ものも地上では望まなかった。ベッドの下

でお祈りをするとき、幸せの躍動に心高まるあまり、この瞬間に死んでしまいたいと願うばかりであった」(33-2-28)……。このころの熱に浮かされたような信仰を、彼は『日記』のあちこちでなつかしんでいる。「16歳のとき、ごく単純に聖人になろうとしたことを忘れるのに成功しない。あのとき真実のなかにいたのだ。あの野心しか賞むべきものはない」(43-8-11)。少年期の純粹さとともに信じられた、このような狂信的なほどの神への思いが、まさしく彼の「原体験」であった。後年の彼の信仰上の揺れ動きは、もっぱらこの原体験との関連でとらえなければならない。

このときの願いであった修道生活への没入は、しかし、比較的早く断念される。さきにふれた軍隊生活のあと、1919年4月9日、コルタンベール通りの、彼がカトリックとしての洗礼を受けた同じ礼拝堂の階段を上りながら、翻然として修道士たることを断念したときの事情は、『日記』の1941年3月30日の記述、および『開かれた千の道』(1004-1006)に詳しい。

「これは反抗(révolte)ではなく、逃亡(désertion)であった」といい、「死ぬかと思うほどきびしい断腸の念」があったとしながらも、「巨大な重荷が肩からすべり落ちた」という感慨を告白している。「その一瞬に地上全体が私に贈られたかのように、そして私がいわば中世から出てルネサンスの真ただ中にさしかかったかのように」彼は思うのである。おそらくはこのころ、従軍による視野の拡大、新しい世界の発見に加えて、平和の回復による解放感もあったであろう。1916年の回心からまだ3年しか経っていないとはいえ、数々の目新しい体験が彼を大きく変えたのであった。

グリーンの内面生活を追っていくうえで、この1919年の春はなかなか重要であると感じられる。「おそらく1919年3月の、この最後の一週間ほど、私の心が軽かったことは絶えてなかっただろう」(Mille, 1001)。生きる喜びにまかせて、彼はパリのあちこちを歩きまわり、理由もなく笑い、詩や物語を書く一方で、デッサンに手を染めたりもしている。そして、グリーン青年期のもう一つの大きな事件、ベートーベンの「第九交響曲」による

新しい世界の啓示も、彼自身の記憶によれば、このころに起こっている。この曲によって、彼はいわば別種の宗教性、「聖なるものを感受する能力はカトリック教会のみの所有物でないこと」を驚きをもって認め（1939年日付なし）、「神はまた歓びのなかにもおられること」（Mille, 1004）を垣間みたのであった。この体験は、地上世界の容認としてだけでなく、非カトリック的な宗教原理の暗示という点とりわけ重要であろう。グリーンのこれからのたたかいは、単に宗教性対現世の肯定という図式にとどまらず、宗教性そのものの中味をめぐる行なわれなければならないのである。

とはいえ、——この点がいかにグリーンらしいのであるが——現世の歓びにみちみちていたこのころ、彼の宗教への関心はむしろ高まっているふしがみられる。修道院入りは断念されるとはいえ、これに先立つ1918年の秋から冬にかけてしきりに宗教書をあさり、たとえば Marguerite-Marie Alacoque の自伝を読んでいたと感動したことが知られる。「私は燃えていた。ということはつまり、からだの向かうところどこでも、私は堪えがたい熱情を痛いほど感じていたのだ」（Mille, 1004）。問題はおそらく精神の働きの全般的な高揚にあり、はげしく地上の歓びを追求する気持は、同時に宗教的情熱の高まりをも促進しうるのである。

熱情といえ、1916年の回心当時彼にみなぎっていた信仰の高まりは、ジュリアン・グリーンという極端に赴きやすい、烈しさをうちに秘めた人物のありようをよく物語っている。『開かれた千の道』で彼はこのころを回想しながら、当時読みふけていたレオン・ブロワの著作が、自分のうちの狂信者を目覚めさせたのだという。中間的な段階を経ないで、すぐに絶対を欲していたこと。愛の生活という、キリスト者としての単純な生き方ではなかったこと。一度もたたかったことがないのに、勝利の果実ばかりがつつと求めていたこと。要は、まだ何も知らず、傲慢さのなかで聖人たらんとしていたこと。グリーンが自らをかえりみて語るこれらの言葉（Mille, 965）は、はなはだ的確に彼の宗教意識をとらえている。数年さき

の『パンフレット』でふたたび頭をもたげるような狂信的な基盤が、明らかに彼のなかにはあり、いつ姿をあらわすかもしれないこの危険な要素をどう持ち運ぶかが、実際彼の課題であった。「私のなかにいる狂信者は、いつも片目でしか眠っていなかった。彼を目覚めさせるには、ほんのわずかなもので十分であった」(Terre, 1165)⁽⁸⁾。

そして、このような激した信仰のあり方は、純粹である分だけ、かえって早く挫折を運命づけられていたといえるだろう。本来、純粹さは短命であり、人生の試練にもとづかない熱情もまた、維持するのがむずかしいものだ。それに上にもみたように、熱情自身は両方向に働きうるものであるから、純粹な信仰の基盤となる熱情からは、逆に地上を謳歌する方向に向かう可能性も生じるのである。グリーンが比較的早く修道生活の夢を放棄したのは、この間彼が変わったからであるとともに、その宗教感情の性質そのもののせいなのである。

それにしても、その夢は実現しなかったにしても、ジュリアン・グリーンという人物と修道士の生活とは、何かしら本質的な連関で結ばれているように感じられる。宗教感情の性質ばかりでなく、彼にいつもつきまとう少数者の意識からいっても、生まれる時代を間違えた、自分はこの時代に属していないのだという抜きがたい嘆きからいっても、彼が世を捨てどこか僧院の独房にいる姿は、わりあい容易に思い描けるのである。母において根強かった敗れた南部の民としての悲哀が、グリーンの心の奥にもやはりわだかまっていたこと、彼がともすればこの世を基本的に危険の場所とみなそうとしていることを、ここに思い合わせてもよい。これはグリーン自身も十分意識するところであって、修道生活をめぐる問題性は、これが断念されたことよりもむしろ、この夢がのちに及ぼしていく深さにある。

1919年4月の断念のあと、その秋からのアメリカ留学時代においてもなお、修道院に身を置くか、あるいは司祭になる願いが、しばしば彼の心をよぎったことは、『遙かな土地』のあちこちから察せられ、サヴェンナに住む

おじ相手に、「おじさん、ぼくは司祭になりたいのです」といい切る場面もある (Terre, 1116)。さきにみたように、ハヴロック・エリスに接して以来、この種の発言はふつつり後を絶つけれども、長大な『日記』が示すように、その後の歩みのなかで、この思いはひんぱんに、ほとんど固執観念のように繰り返される。「1919年、私がどこかの僧院にはいていたとしたら、どうなっていたらうか。もうひとりの男、私になっていたかもしれない男は、今何をしているだろうか。彼はよい修道士だろうか」(42-10-11)。「私はときどき、私を世間からへだてる見えない独房の壁のあいだで生きていると感じる」(59-5-18)。「呼びかけは今でも、魂の奥底のどこかで鳴りひびいている」(70-7-30)……。私たちはのちに、1939年のカトリック教会への再回心のころ、友人のジャック・マリタンあての手紙で彼が修道院入りの希望を語るのをみるであろう。

3

このように、1922年7月、3年間のアメリカ留学を終えてパリへもどったグリーンは、いわば「おとな」の域に近づきつつあったのである。軍隊生活や留学によって広い世界を見ることができたし、なまなましい性的現実を目を開かれもした。ただ熱情的なばかりの信仰も——少なくとも表面的には——かげをひそめた観があった。これらの経験を活用しながら、この年頃の青年らしく、生きることを存分に楽しむ条件はととのっていたのである。もっとも、「いちども自分の年齢通りであったことがない」(54-8-17)と語るのがグリーンらしいところであり、世にいう「おとな」になりきれない部分が、彼にはいつもつきまとっているのであるが。

この時期彼に欠けていたものといえ、心と頭で痛切に知った同性愛なるものを实地に体験することばかりであった。健康な身体と烈しい肉感性をそなえた青年に、これは早晩起こらずにいることはできない。『遙かな

土地』につづく、驚くほど赤裸々な回想録『青春』には、1923年3月のある夜、突然「欲望の病気」にかかり、「自分でも知らぬ人間」になり変わったかのように、読みかけのチャールズ・ラムについての著作を伏せて、「出かけるよ」といいおいたまま、小雨の降る街路に飛び出すさまが描かれている。一種の本能に導かれて道をたどり、自分と嗜好をともにする行きずりの男を相手に、彼はこの夜思いをとげたのであった。

「この瞬間からあと、自由、判断力、冷静さは、当分使用停止の状態であった。私は強力な手につかまった上出来のおもちゃとなり、完璧な正確さで動く機械のように、習慣が以後いつまでも働き出そうとしていた。毎夜、私が街をうろつく姿が見られた。見かけは行きあたりばったりであったけれど、不注意な観察者なら無人と思うであろう区域のなかで、もっとも好都合な道筋をすでによく知っていたのであった。私の運命、これがそうだったのだ。そして、今後どれくらいの期間？」(Jeunesse, 1351)

いったん堰を切った流れは押しとどめようもなく、それこそ機械のような正確さで彼は夜ごとの出歩きの習慣にまきこまれていく。そしてこの最初の夜、家へ帰ってからの彼が、「奇妙な、ほとんど表現不可能な歓び」を感じていることに、私たちはとくに注意を向けないわけにはいかない。

「もしこんな言葉が意味をもちうるとして、私は全面的に私のからだになったように思えたのであった。異様なほどの安らぎが、私のふだんの心配事を、将来や仕事について絶えず気にかけていた問題のすべてを、かき消してしまった。シーツの下に身をすべりこませながら、私は急にひとりで笑いはじめた。まるで生きているというそれだけの事実が、一種の動物的な至福で私をみたすのに十分であるかのように。私はさきほどイエナ橋からそう遠くない場所で行なわれた情景を心でもういちど生き直した。おぞましさは感じなかった」(Jeunesse, 1351)

さらに少し先には、彼がこれらの行為にさして罪悪感を抱かなかったばかりか、「私が破滅にいたることはないのだ」との確信にみちていたと語ら

れている。「まったく悪魔的な思い上がり」,「際限のない靈的盲目」ときめつけながらも、当時「どうあっても私の魂は救われるのだ」と信じこんでいたことを、グリーンは回想するのである (Jeunesse, 1353)。もともと、幼いころ母から、「あなたは救われているのよ」ときっぱり告げられた体験 (Partir, 663) が彼の心の「測り知れない奥底」に沈みこんでおり (52-2-16),「自らを傷つきえないものとみなすことが、[彼]の宗教の一側面をなす」 (Jeunesse, 1422) という事実がある。自分でも認める通り、このような信念は「同時に有益にして危険」 (52-2-16) なのだ。今の場合、それが危険な方向にあらわれたと認めるほかないであろう。

ともあれ、肉体的快樂にこれほどの没入を見せ、歡びとともに何かしら誇らしさをすら感じるグリーンの姿に、私たちはとまどいを覚えずにいることができない。「河岸や道路に人がいないのがたしかなときには、私は歌っていた」 (Jeunesse, 1353) と彼は書くのである。一種の恐怖と、強い罪惡感とともにしか肉体に近づくことができない、私たちがふつう抱くジュリアン・グリーンのイメージと、はなはだしく違うと感じざるをえない。たしかに、永いあいだ抑圧されていた欲望の、これが最初の発散であり、やがてどうしても信仰上の苦惱が開始されるという事情はある。また、彼が「私が拒否していたのは性的なもの (sexualité) 全体であった。それが多数者のものであってもなくても」 (Jeunesse, 1409) とのいい方をするように⁽⁹⁾、欲望が同性に向かうかどうかより、肉欲それ自身が彼の問題であったという側面もある。私たちは、「同性愛」なるものについて偏見を捨ててかかる必要があるだろう。それにしてもなお、グリーンが肉欲に際限なく引きずられる可能性を具えた人物だということ、男たちを求めてのおびただしい夜の出歩きに、彼が進んで赴いたこと。これは、何ら疑う余地のない事実である。「パリの街の散歩が、一回一回ひとつの試練なのだ」 (28-9-22)。「私がその限りをつくしている快樂」 (31-9-21)。「私は肉体的戀愛なしにすまずことはできない」 (33-1-24)。「夜も昼も、私はうちに激しい

飢えをかかえている。(.....)私は、私の全存在が肉体的幸福を乞い求めているのを感じる」(34-7-30) 私たちは、彼が放蕩者の一面をもつことを、否応なく信じさせられてしまう。

この同じ放蕩者が、しかし、ほぼ一年後のあの峻烈な論難文『フランスのカトリック信者に反対するパンフレット』の著者でもあるのだ。日常化し驚きとめまいを忘れた信仰のあり方を糾弾しながら、カトリック信仰の根幹をなす「秘義」の秘義たるゆえんを、原初の輝きにおいて全面的にとらえ直すべきだ、と彼は力説するのである。天のことがらは「ただただ熱と烈しさ」にほかならず、「本当の宣教は狂気に属する」。なまぬるい無感覚こそ「重要な唯一の異端」であり、気の抜けた賛美に比べれば「まだしも瀆神の方が望ましい」のだ。「もしかしてカトリシズムは破産したのではないだろうか」。若さと怒りと神秘に対する極度の敏感さが入りまじったこれらの主張には、かつて彼に修道院入りをうながしたのと等質の魂が息づいている。「片目でしか眠っていない」狂信者が、ここで目を覚ましたのである。そして、これらの烈しい言葉を通じて、微温的な信者に的を定めながら、実は欲望に流されるばかりの自らのふがいなさののしられていることも、十分考えられるところであろう。

一方での放蕩者と、もう一方での神秘家。私たちはグリーンの中に、相反する二人の人物が、どちらも極端にまでつき進む可能性を保ちながら併存しているのを認めることができる。自ら語る通り、彼は「極端から極端へと移りゆく人物」(50-7-27)であり、「過激な魂は聖性にも悪徳にも大胆に身を投げるであろう」(50-11-7)。『ジキル博士とハイド氏』が青年グリーンの愛読書であったこと。1919年春の試作 *Jean-Sébastien* (Mille, 1002)にしても、大学時代に思いつき、のちに『私があなたなら』となって結実する小説のテーマにしても、1927年の『地上の旅人』にしても、初期作品の重要なテーマの一つが、自己の二重化、あるいはその統一の探求にあったこと。「ぼくのなかに二人の人間がいて、一人が苦しむのを

う一人がじっと見ているようだ」と嘆く『モイラ』のジョゼフのように、その後の作品においても自己分裂がひんぱんに問題にされること（神秘家と放蕩者の併存として、作者にもっとも近いのは、おそらく『人みな夜にあって』のウィルフレッドであろう）。各人に宿る二人の人間についての聖パウロの言葉（ローマ人の手紙、第7章4節以下）に、グリーンがことのほか関心をよせ、さまざまな機会に引用していること⁽¹⁰⁾。——この点をめぐる彼の問題意識は、今日まで広くかつ深い。「私が本当によく理解したのは、これまでただ二つの型の人間だった。すなわち、神秘家と放蕩者。なぜなら、両者とも極端に走り、それぞれ自分流に絶対を求めるのだから」（40-12-30）。自分のうちに宿る神秘家と放蕩者をどう持ち扱うかが、まさしくグリーンの中心的な課題であった。

当面、両者は対立したままである。熱、力、それぞれなりに「絶対」を求めること。何とんでも同じ人間に発する以上、両者を結びつける要素はいくつもありうるにしても、このころのグリーンにとって二つはまったく相容れないものであった。『パンフレット』が示すように、彼の宗教意識は神秘への感覚にもとづく超絶性を特徴としていたから、宗教は日常生活をはげしく揺すぶりこそすれ、平穏な快楽の享受を認めるていのもではなかった。それにもともと彼の快楽の追求は、そのような「良識的な」充足の範囲におさまりきれない烈しさをそなえてもいた。肉欲のこれほどの執拗さに対抗するためには、彼として聖人になるという極端な夢をあらためて描くほかはなく（「私にはもはや聖人になることしか残っていなかった」（Jeunesse, 1401）。「私は聖人になりたかった。それがすべてだ」（38-6-23））、その夢が実現不可能なことは十分実証済みであったのである。欲望の烈しさによって信仰の強さが呼び求められたかと思うと、そんな信仰に値いしない自らを思い知って、ふたたび快楽の追求へと引き戻されていく。中間的な妥協点を見出せないまま、二つの力はおっぱら緊張関係にしかなかったのである。

いやむしろ、妥協点を見出すこと自身が若いグリーンの目には忌むべき欺瞞とうつついていたのである。彼は少しのち、もう教会へも行かなくなったところをかえりみて、「私は教会へ行くことによって偽善者の相貌を呈するような気がしていた。教会が罪人の隠れ家だという思いは、私の心にはなかった。(……) 青年は絶対を強く求めるものだ」(新版『レヴィアタン』序文, 11-12) と書き、1944年になってもなお、「私は快樂の生活と宗教の実践を和解させようと試みることに存在する偽善性を、強く感じている」(44-4-21) と述べる⁽¹¹⁾。『パンフレット』がもっぱら神にかかわることがらへの人間の盲目、惰性化、無感覚ぶりを槍玉に挙げることに重点をおいており、罪人への神の慈愛という観点が奇妙に欠けているのを思いあわせてもよい。すべては罪の深さを強く実感するところに発しているが、罪と救い、罪の深さと神の愛について新たな展望に導かれていくには、まだまだ時間が必要であった。

問題を困難にするもう一つの事情として、肉の苦しみにについての適切な回答がキリスト教の側にうまく見出せないという嘆きにも注目しなければならない。「私を荒々しくさいなんでいる 問題についての福音書の沈黙」(33-3-29)。「性の問題について教会が沈黙を守っていることが、私をとまどわせてやまなかった。〔この点をエルンスト・ロベルト・クルチウスに打ちあけたけれども〕彼の返事は、この厄介な問題を自らに投げかけているのは私ひとりではないのを知るという励まし以外の助力にはならなかった」(新版『もうひとつの眠り』序文, 11)⁽¹²⁾。のちに『モイラ』のジョゼフがためらいがちに、しかも思いつめて発する大胆な問い、「イエスもまたこの種の飢えを経験されたのか」(Ⅲ, 144-145) は、この時期のグリーンの切羽詰まった胸のうちを反映するであろう。イエスをあまりにも人間に引き寄せる、たしかに冒瀆的な問いかけではあっても、それは彼の心に抑えようもなく頭をもたげるのであった。

1924年、『パンフレット』を書き了えたころからあと、肉なるものと神への思いとのあいだの揺れ動きは、全体として前者に大きく比重がかかっていく。内心の不安をもてあましながらも、彼は地上の魅惑に屈する。『パンフレット』によって積もる思いを吐き出し、微温的な信者にかこつけてついに聖人たりえない自分自身を思うさまののしったあとは、一種の解放感を味わうこともできたであろう。それに、信仰なるものをあまりに高く、あまりに超絶的なところに位置づけた結果、かえって日常の視野から遠ざけてしまったという側面もある。249の断章を閉じる『パンフレット』の最後の一句、「真理の力が強すぎると、人はこれを吐き出す」は、この点はなほだ暗示的といわなければならない。

「24年から36年まで、私は幸福のなかを転げまわっていた。このことが恐怖を抱かせる瞬間もあった。だが、宗教的不安がすでに、しだいに拡大しつつそこにあった」(74-11-11)。これからさき30年代の終りまでは、(正確には1939年の再回心にいたるまで)グリーン生涯でも、ことのほか興味ぶかく、問題性に富む時期である。この時期、一方での宗教意識ともう一方での地上の享受は、単に二律背反の図式を示すばかりか、両者のあいだの微妙な結合、入り組んだ交錯の姿もみられる。宗教意識はカトリシズムの範囲を出て広くに及び、もう一方の現世の受容もまた多角的な変容なしにはすまないからだ。この時期のグリーンをあとづける意義は、ひとりの人間がここまで深く、ここまで広い振幅のなかで内面生活を生きつづけたという点に求められる。実際、人間の内面とは外部に劣らぬ葛藤と冒険の舞台なのだ。

むろん、誰ひとり社会の状況から自由ではない。グリーンにおいてもまた、この時期の地上的な姿勢は25年のロカルノ会談当時のヨーロッパにみられた、平和を享受する風潮と何ほどかは通じあっている。そして、恒久

平和の幻想がもろくも崩れ、ナチスの進出を経て再度の大戦へと急速に傾斜する多端な時代が、危機と終末の意識として、むしろ密接に彼の内心の問題となることを、私たちは追ひ追ひ見るであろう。

1924年という年を彼の生涯での大きな転回点とみなせる一つの理由は、この年の秋、以後無二の親友となる Robert de Saint-Jean とはじめて出会ったことにある。回想録『青春』の本文は、11月22日、フランソワ・ル・グリという人のサロンで、「考え深げな大きな目をした美しい顔だち」の青年が彼に声をかけるところで終わっている。

「愛は、ただの一目で生まれた。そして私は苦しまねばならなくなるのを怖れていた。これまで私は、いつもそうなる習わしではなかっただろうか。また私は人から愛されぬ男ではなかっただろうか。しかし、今回は間違っていた。幸せの年月が私を待ち受けていた。私の青年時代のもっとも美しい年月が」(1464)

ここで名が伏せられているこの人物がロベール・ド・サンジャン以外でありえないことは、たとえば英文の回想録『幸せな日々の思い出』からも明らかである。「この日、同じ部屋で、私はその友情がかつて私を裏切ったことのないひとりの友人に出会った。この事件を呼び起こすのに日記の必要などないのだ。私たちは良き日、悪しき日を通して、ずっと一緒に過ごしてきた。そして私は愛情とともに、彼の名を記しておく。それはロベール・ド・サンジャンである」(263)。彼が生涯の伴侶 (le compagnon de ma vie) と呼ぶこの友人との出会いがどれほど貴重であったかは、彼の書くもののほぼいたるところから知られる。「私の生涯においてこんなに大事であった、あの1924年の午後。それは最後の日まで私の生涯を照らし出すであろう」(53-11-21)。「私に幸せを返すことができたのはロベール以外にはない」(30-5-18)。「[ロベールに出会ったとき]私は私の生活が変わるであろうとの確信を抱いた。歓びより、むしろ恐怖に近い感動を私は覚えたのである。愛に狂うとは、まさにこのことであった」(「青春の終り」

484)⁽¹³⁾.....。

これ以後、彼は生活のかかなりの部分をロベールとともにし、たびたび連れ立って旅行に出かけるばかりか、のちには同じ住居で暮らすようになることすら『日記』から察せられる。異論なく、グリーンの生涯でマークと並ぶ重要な人物である。しかも、マークの場合思いが相手に告白されないまま、すべてが内心で進行したのに反して、この方は十分現実の裏付けを得たのであった。また、マークが後年もおそらくグリーンを書くものに目を通さずに終わった平凡な一市民であったのにひきかえ、ロベールは小説も書く練達のジャーナリストである⁽¹⁴⁾。さらに、両者のあいだのもっとも大きな相違は、抑圧と誘引からなる起伏のはげしい愛とはおよそかけ離れて、多くの共通点にもとづく相互理解の実感がこれによって保証されたことにある。ロベールを知ったからといって、グリーンの同性への誘引が格別力を弱めたとはいいいにくく、肉をめぐる懊悩に本質的な相違は見受けられないけれども、日常生活や芸術体験の万般に及んで心おきなく語りあえる友を得たことは、何ととっても貴重であった。これを称して「結婚」の語をあてるのは何としても穏当を欠くが、ともかくこれ以後基本的なところで平穏な日常生活を可能にする枠組はでき、よき助言者を得て文学に打ちこむ条件もととのったのである。ロベールと彼とを結びつける絆ははなはだ微妙であって、肉感的なものの占める度合を見定めるすべとてないが、前掲の「青春の終り」に、「心情が欲望にまさっていた」との言葉が見られ、これが「一切の性的なものを欠いた、こんなにも激しい愛」と呼ばれていること(484)に注意を払っておく必要がある。

友人についていえば、この時期からはじまるアンドレ・ジイドおよびジャック・マリタンとの交友にもまた、注意を向けずにいることはできない。どちらも、グリーンの生涯を貫いてつづく豊かな心の交りである。

ジイドはグリーンを最初に認めたひとりであり、『地上の旅人』にも、『パンフレット』にも強く心を動かされている。二人がはじめて顔を合わ

せたのは、1923年の冬、ある共通の友人の家においてであった。『日記』の第1巻『容易な年月』の序文で、グリーンはここをなつかしく回想し、「口を開くたびに、彼は私が私自身にもどることを強くすすめた」と語る(17)。すべての可能性を生かすことを賛美し、たえず自己自身であることを求めた、いかにもジイドらしい忠告である。同じくプロテスタント的な基盤で育ち、同じく同性愛者である点、二人の共通点は強く、クローデルがジイドの同性愛傾向について、「行動の規範を自分自身の中にだけ求める」プロテスタント的習慣と、「もっとも許すべからざる行為に光明を与え、興味を覚える審美的な迷妄」⁽¹⁵⁾を原因にあげているのをみると、これらがいくらかはグリーンにも通じることに気づかざるをえない。もっとも、グリーンはジイドの『コリドン』の論旨に必ずしも賛意を示さず、自然世界に例をとって自らの嗜妙を擁護することの奇妙さを指摘するのであるが(『青春』270)。また、グリーン自身についてなら、性的なことにきわめて潔癖であった母と、五人の姉たちに囲まれて育った家庭環境を考慮に入れることがどうしても必要であろう。「女ばかりの家庭で、いつか男であることを恥じる気持を強めてきた少年が、男であることを自己確認したくて、同性への思慕を持つようになる」⁽¹⁶⁾という事情が伏在しているのかもしれない。問題はなかなかデリケートであるが、同性愛を扱った本に、母親を熱愛する、非攻撃的で芸術的な男性が男色者の標準である、とあるのをみると⁽¹⁷⁾、何かグリーンのことがいわれているような気がする。

グリーンとジイドのあいだに多分の共通点が存在するにしても、二人をはっきり分かつのは、ジイドにあるカトリック教会への憎悪である。この点はグリーンを気づまりにさせたし、1939年の彼の決定的な回心をジイドが喜ばなかったことは『日記』にもみられる(45-10-8)。グリーンとしては、自分自身に忠実であれという年長の友の教えに従ったつもりであるが(『容易な年月』序文17)。だがこの食い違いも、二人のあいだに親しい交りが結ばれる邪魔にはならず、ジイドの死にいたるまで、年齢の相違を越

えて長い友情がつづいた。ジイドは、はるか年下の友に庇護と助言と忌憚なき意見を、惜しみなく注いだのであった。

教会ぎらいのジイドの対極に、ネオ・トミズムの哲学者ジャック・マリタンが位置する。ジイドと同様、マリタンも『パンフレット』の固くきびしい調子に魅せられたひとりであるが、何でも話しあえたジイドと違って、マリタンについては若干の屈折が感じとれる。「1925年、私の進路にジャックを置きたもうたのが、神のなされた最大の恩恵の一つ」(55-6-18)と、この貴重な知己に恵まれた喜びをあらわに示す一方、全面的な告白の相手としての彼に多少のためらいを覚えもしている。「ひとりの男、ジャック・マリタンなら、もし私が心を打ちあけていたとして、事態をはっきり見通す手助けをしてくれたであろう。しかし、これほどまで明白に肉体を欠いた人と性の問題を話しあうのは、私には不可能と思われていた」(「青春の終り」498)。たしかに、彼との出会いは多少時宜を得ていなかったかもしれない。「もし私がもっと早く、たとえば1917年、私の回心の直後に、あなたに出会っておれば、私の人生はまったく違ったものになっていたでしょう」⁽¹⁸⁾。しかし、この真摯な往復書簡集『ひとつの偉大な友情』が物語るように、これからさきマリタンの存在は、グリーンにとって彼方の星、希望の輝きの意味を持ちつづける。「何回も私は、あなたのことを考えては、わるい行いに陥るのを思いとどまりました」⁽¹⁹⁾ という言葉は文字通りに受けとるべきであろう。あれほど巨大な、手に負えない肉感性をかかえて生きなければならなかったグリーンが、ともかくも大きく踏み外すことなく生きおおせたのは、一つには心のどこかにマリタンを置いていたことによるといえるかもしれない。

5

さて、1924年にはじまる数年間は、グリーンの生涯でもとりわけ旺盛な

創作活動によって際立つ。4巻の回想録を通じて、書くことが早い時期からグリーンに関心事であり、1919年においてすでに《Jean-Sébastien》という物語の試みがあったことを知るが、これまでに公刊された限りでの最初の作品である短編「見習い精神科医」は、アメリカ留学時代に書かれた。帰国後の1924年夏には「クリスチーナ」、ほぼ同時に初稿『モン・シネール』が書かれ、中編「地上の旅人」がこれにつづく。決定稿『モン・シネール』は翌25年6月に着手のあと、ほぼ4カ月後に完成を見、以後長編だけをとっても、『アドリエヌ・ムジュラ』（1926年7月着手、12月完成）から『レヴィアタン』（1928年1月から約1年間執筆）へとつづく。この間、中編「死の鍵」、短編「レヴィアタン（無益な航海）」のほか、1984年になってようやく『めまいの物語』に収められたいくつかの習作⁽²⁰⁾、それに『イギリス組曲』を構成する英米の作家論のたぐいもあるから、生涯を通じてそれほど多作とはいいがたいグリーンの創作ペースからいえば、相当な密度ということになるだろう。

これらの作品を見わたすとすぐ、一様な暗さが目立つ。作中に何ら救いのかげはなく、おしなべて、追いつめられた魂の絶望的なあがきそのものである。飽き足らぬ日常生活、抑圧された欲求、うちにひそむ得体の知れぬ「怪物」に押しやられて、人物たちは烈しく「解放」を追い求める。しかし多くの場合、それは狂気、暴力、殺人など悲劇的な結果にしか終わらないのだ。

これまでみてきたように、このころの作者が相対的に現世の肯定の方に傾いていたことを思うと、こうした作品世界はどうしても奇異に映じる。そしてその思いは、作者にとっても同じなのだ。「1925年の春、私は4カ月後に完成することになるこの小説をはじめた。半世紀の距離をおいて見たところで、それは私の目に秘密を抱いたままでのいるのだ。というのは、私は最初の数ページを、幸福が私の生活にはいりこんできたばかりのころに書いたのであった。そして、炎でおおわれた最後の章に来るまで、私の心

はただ歓びでしか鼓動していなかったように思える。私たちの構想するこれらの物語は、いったいどんな暗黒の深部から出て来るのであろうか」(新版『モン・シネール』序文7)。

1926年に書きはじめられた『日記』⁽²¹⁾のちょうど1ページ目に、「さしあたり私は完全に自分だけで想像した作品しか作りたくない。(.....)モデルを使ったりしたら、私はインチキをしたような気になるだろう」(26-4-10)⁽²²⁾という言葉がある。若い潔癖な作家には、事実にもとづいた創作は、さぞかし卑怯に思えたのであろう。しかしまた、「ひとりの若い男が自らを語らずにペンをとるなど、まず不可能だ」(新版『アドリエヌ・ムジュラ』序文24)というのも、やはり真実である。いかに幸福にみたされた一時期であっても、深層によどむ苦悩が何らかの形で作品にあらわれずにいることはできない。

この時期、いかに幸福が前面を占めていようとも——あるいはむしろ、そうであるがゆえに——それに対抗するもう一方の極がやはりグリーンを深く苦しめずにおかなかったことは、いくつかの事実によって知られる。1925年には、「その後あれほどよく経験することになる心の悲嘆に追いやられて」どこへ行くともなくパリを抜け出し、足の向いたモンフォール・ラモーリとドルーの町を、まる2日間さまよい歩くという出来事があった(新版『アドリエヌ・ムジュラ』の序文22-23)⁽²³⁾。これが『アドリエヌ・ムジュラ』で、女主人公がやはりモンフォール・ラモーリを放浪する場面の原型となる。また、『パンフレット』の執筆が終わったころ、1924年5月8日の日付で、彼は次のような悲痛な神への祈りを書き記している。これはそのほかの未発表の原稿とともにのちになって見出され、『日記』の50年7月21日の個所に引用されている。当時のジュリアン・グリーンの心のなかをうかがう、きわめて貴重な資料であるから、ここで全文を訳出することにしたい。

「主よ、平和と静けさと、心の平穏、精神の平穏を私に与えてください。

私は地上の歓びを追い求めたのではありません。地上が私のところへ来て、その歓びを授けてくれたのです。その歓びの苦いこと。おお神よ、私はそんな歓びはほしくありません。むしろ、ほしくならずにいたいのです。私の肉のからだを消し去るのは、あなたのお力に属します。でも私は、私の時が来るまであなたがそうはなさらないのを知っています。そして私の時は、まだずっと先です。私は完成にはほど遠いのですから。でも、ごらんください。私の肉の悲しみを。夜明けの欲望、昼の欲望、夜の欲望。あなたはこんな悲しみを味わわれたことはないのでしょうか、主よ。あなたはこのことを何も語っておられません。誰も、そんなことには口をつぐんだままです。では、この悲しみは不当なものなのでしょうか。一切の高貴さはもっぱら精神から来、肉体は、それでは無なののでしょうか」

祈りというにしてはいささか難詰めいた、だがそれだけに切実なこれらの言葉を通じて、当時の彼の姿が透けて見える。イエスに肉欲があったか、というのが彼の切羽詰まった問いをなしていたことは上にもみた。神に強くひきつけられながらも、地上の魅惑に屈し、心ならずも神から離れていかざるをえない名残り惜しさ、あるいは恨みのような気持が、この祈りから読みとられると思う。彼が幸福に身を浸していたとはいえ、このような内面の格闘までをも廃棄することは、とてもありえなかったのである。

「テーブルが木で造られるように、小説は罪から出来る」(55-10-27)。「悪を除けば、小説から何が残るか」(57-3-29)。「白は小説家が巧みに使いこなせる色ではない(それが色だとして)。作家は黒を用いてはるかに巧みであり、黒とはチントレットによれば、もっとも美しい色なのだ(それが色だとすれば)」(43-6-11)。小説は本来、日常を越えた深部に根を持ち、作家の意図にそむいてまで、内面のドラマを映し出してしまふ。一切をどんなに仮構のもとに置こうと、作品が「しばしば作者の知らないうちに、ほとんどつねに告白」になること⁽²⁴⁾は避けがたいのである。

グリーンは1924年の初稿『モン・シネール』について、「一切が与えら

れていた。すべてが実質上ここには存在していた。私の飢えも、私の不安の数々も、生きることの恐怖も」(54-1-24)といい、『レヴィアタン』については、娼婦まがいの娘アンジェールがとある聖堂にはいって物思いにふける場面にふれて(第1部第9章)、「アンジェールは私だ」という(新版『レヴィアタン』序文、また60-4-4)。信仰は持たないけれど、静かな空間に抱かれて少女時代の幸せを思う姿は、そのまま作者の心なのであろう。さらにこの聖堂の名がサン・ジュード(Saint-Jude)(ユダ)であることにも意味があるとグリーンはいう。「私は心の底で、裏切ったという漠とした感情を抱いていたのだ」。

同じような例を探せば、『モン・シネール』のセッジウィック牧師がエミリーにあてて書く手紙に、「宗教がときにはあなたをひきつけ、ときにはあなたを反撥させるのです」(I, 203)とある⁽²⁵⁾のは、グリーンの心そのものであり、少しさきで同じエミリーが「[私]はほかの人たちのようでない」と嘆くのも(I, 219)、彼の作中人物のほとんどに通じる大きな特徴であろう。新版『アドリエヌ・ムジュラ』の序文に、「私はほかの人たちのようではない。私についての困難のすべては、こう要約できるのだった」とあるのを思い合わせればよい。

むしろ、あれこれの細部より、『モン・シネール』、『アドリエヌ・ムジュラ』、『レヴィアタン』の三つの長編が、いずれも決定的なよりどころを失った人間、心に何かの「解放」を求めながらも出口を得られず、空しくさまよいつづける人間の姿を浮彫りにしている点に注目する方が重要かもしれない。エミリー、アドリエヌ、ゲレがあらわすのは、大きくいえば「絶対」から切り離された人間の彷徨であって、彼らはいずれも心をさいなむある激しい「飢え」の存在を感じ、別種の生活にあこがれつつも、自分を導くすべを知らない。彼らはただ、しかるべき発現の機会を見出せずに終わった巨大な力に押しひしがれるばかりなのだ。そしてジュリアン・グリーンが、上掲の1924年の祈りでみられるように、後髪ひかれる思いで

教会から離れて行こうとしていたことを思うと、これらの人物たちのドラマは、いくらか彼自身のものだとわかる。心におさまりきれないくらいの多量の危険な欲望の塊りを宗教の支えなしに持ち運び、ひとり性の深淵に足を踏み入れようとしていたグリーンは、場合によれば彼らと同じ運命をたどったかもしれないのだ。

しかし、彼は作中人物とちがって、どうにか日常のわく内にとどまることができた。彼が大きく踏みはずさずにすんだことについては、さきにもみたロベールやジャック・マリタンの存在があずかって大きかったにもせよ、やはり基本的には「書く」ことの重さを考えるべきであろう。「結局のところ、世にある文学のかなりの部分は、たぶん補償の文学であるだろう。絶え間なしに充足されている男は、はたして書くだろうか」(43-5-7)。本来、文学創造の源にあるのは、不安な、充たされない胸の内の、仮空の人物の転移であろうし、グリーンもまたこのことで苦悩の克服をはかったことは、たとえば次の引用で代表される数々の発言で明らかである。「もし私がこんな狂気を作品に入れなかったとすれば、それが私の生活のなかに腰をすえてしまわなかったと誰にいえよう。一つの平衡に似たものを私に保つことを可能にしたのは、おそらく私の作品なのだ」(33-3-30)⁽²⁶⁾。

むろんグリーンには、日記を書くという道もあった。公刊された限りでいえば、1926年4月に着手、その年の10月までつづけたあと、2年近い中断をはさんで1928年9月からほぼ規則的に書き進めている。日記による直接の吐露が彼にとって不可欠の手段であったのはいうまでもないが、彼の内心のドラマはとてもそれだけで書ききれるものではなかった。「私は自分の本を書くことによって、私の本性の基盤を形づくる凶暴さをだましていくのだ」(29-3-4)。ここはどうしても仮空の物語を構想して、自分の内実を移し入れ、現実世界にはない展開を、思うさま書きつづるほかなかったのである。

もともと、上にみたように彼には現実によりかかることを嫌って、作品

の前での作家の消去をよしとし（『幸せの日々の思い出』273）、フロベールに共感を示しながら、作家の非人格性こそが力だとする（61-6-3）側面がある。しかし一方、「私はついに自伝から出られないように思える」（69-11-2）、「私たちの本は、私たちの実質から出来ている」（41-7-4）と、小説が結局は間接的な告白にほかならないことを主張するのも、グリーンのもう一つの面を形づくる。それにもともとグリーンは、並はずれて強い告白衝動の持ち主なのだ。彼の作品はこれら二つの対立する力の合成物なのであって、もっぱら仮空の物語のなかに、思いがけず作者自身の姿を見出すという特徴がある。そして虚構化され、作中人物と溶けあった作者の姿は、事実の力を借りない分だけ、より純粋な、いわば普遍的な形で、作者の内面をあらわしているように思われるのである。

1924年からの数年、事態はしだいに教会から離れる方向に向かう。「これからも私が私の真実を求めるのは、聖書のなかであるだろう。私の生活がどんなであろうと、けっしてこの本の影響からのがれられないだろう。

（……）主イエスよ、私はあなたのおっしゃるすべてを信じます」（26-4-12）と、聖書を読む習慣は依然つづけながらも、「パリの街の散歩は一回一回が試練だ」（28-9-22）、「私は心のなかに一種の地獄を持っているような気がする」（28-11-1）のような、誘惑の限りない強さに苦しむ言葉はあちこちにある。「ああ、肉は何と異様な十字架であろう」（28-11-9）。肉の苦しさをどんなに痛感しようとも、いったん肉の洗礼を受け、快楽に酔いしれた体験は、もはや後もどりを許さない。このころ、快楽の体験に事欠かなかったことは、疑いを容れないのだ。

このころの日記に悲痛の色が濃いのもこの点当然であり、また後年、たまたま聖書に「傲慢、飽満と豊富、そして安逸」とあるのを読んで、「まさに、1928年と1940年とのあいだの私の生活そのものだ」（42-3-24）と叫ぶのももっともであろう。だが、ほかのところで1928年にふれて、次のよ

うにもっぱら幸福の年としているのにも注意を向けておきたい。たしかに観点を変えればこの見方も可能であり、宗教を離れて、快楽体験の持つ幸福の側面にだけ目を向ける見方もあったことを、この一節は示している。

「昨日、1928年の私の日記を数ページ写した。予想通り私は悲しくなった。私はあの中のパリを、コルタンベール通りの私たちのアパルトマンを思い出した。幸福すぎて私には不安に思われたかもしれないほど幸福な人生の全背景を。だが、宗教は私の心をほとんど占めていなかった。私は快楽に魅せられていた。(.....)1928年から、私はもうほとんど祈らなかった。1933年に、祈ろうとしたが祈れなかった。ついで1937年に、少し祈れるようになった」(41-9-28)

快楽体験の苦しさによっても、逆にその楽しさによっても、このころのグリーンがしだいに信仰の実践から遠ざかっていったことはたしかである。楽しければ楽しいで宗教は視界から去るし、一方上にみたようなグリーンの心の働かせ方からいって、これに深く悩むとしても、そこから出てくるのは快楽家が神に頼るのは偽善だという意識のほかにはない。上の引用には、1928年から祈らなくなったとある。1929年4月の日記にはさらに、「目下のところ、自分をカトリックと呼べるためには、あまりに多くのものごとが私を教会から引き離している」(29-4-10)と書かれている。

さて、ジュリアン・グリーンがこのように地上の魅惑に引きすえられていくうえで、さらに大きな一歩となるのが1929年夏のオランダ、ドイツ旅行である。とくに、ハーグのマウリッツホイイス美術館近くのカフェで交わした友人ロベールとの対話が、グリーンの教会からの離脱に強く拍車を加えることになる。日記ではつかみにくいこの間の事情が、今では新版『レヴィアタン』の序文、およびそれをほとんど字句通りに再録した「青春の終り」で、かなり詳しく知ることができる。そして今回の転回は、『もうひとつの眠り』にはじまる作風の変化をうながし、グリーン内面世界の問

題意識をさらに広げる性質のものであった。これらの点については、次の機会をえて検討を加えることにしたい。

〔注〕

- (1) 『日記』からの引用はプレヤード版全集による。以後、32-12-26のように省く。また、グリーン作品からの引用は、とくに断わらない限り、すべて同版の全集による。
- (2) 拙稿「1924年のジュリアン・グリーン——『フランスのカトリック信者への訴え』の背景」(青山社「流域」第10号)。
- (3) グリーンは1917年、第1回のバカロレア試験に合格した直後、アメリカン・フィールド・サービスに志願してアルゴンヌ地方に赴いたが、若年の理由で除隊され冬のはじめにパリへもどる。12月にふたたびアメリカ赤十字に加わって、イタリアに出発。翌18年6月にいったんパリへ帰り、9月に今度はフランス陸軍に志願して、フォンテーヌブローの砲兵学校にはいる。グリーンがすべての軍務を離れて帰宅したのは、1919年1月であった。
- (4) 4冊の回想録の名は次のように省略する。『夜明け前の出発』Partir, 『開かれた千の道』Mille, 『遙かな土地』Terre, 『青春』Jeunesse。引用はいずれも、プレヤード版全集第5巻から。
- (5) 「この傷口を通して」。スペイン語。
- (6) 雑誌《L'Express》, 1982年6月4日号のインタビューにおいて。
- (7) Julien Green: *Ce qu'il faut d'amour à l'homme*, p. 62.
- (8) 同種の発言として、「私のうちには十分眠りこんでいない狂信者がいる。彼を起こさない方がよい」(32-1-21)。
- (9) この点についてはさらに、Jeunesse, 1467 を参照。グリーンは「娘たちを追いまわす結婚した男の不品行と、私のように男の子を追う男のそれとのあいだに、モラルの観点において私はどんな相違も認めていなかった」と述べる。
- (10) 『日記』44-4-9, 72-5-13などのほか、最近では、*Frère François* (『アシジの聖フランチェスコ』) p. 14。
- (11) また『日記』34-11-6に、「福音書を読むことと、それでもなお快樂が自らの役割を演じている生活とを、どのように和解させればよいのだろうか。それは私には可能だと思えない。どうしても、肉体か魂かが苦しまざるをえないのだ」。
- (12) また、44-9-21にも同じ考えが述べられる。
- (13) グリーンの4冊の回想録は1984年、*Jeunes Années* の総題のもとに、これまでフランスで発行されなかった小冊子 *Quand nous étions tous ensemble* も

含めて、Éditions du Seuil 社の《Points》シリーズで2冊に分けて出版された。第2冊の巻末には、《Fin de jeunesse》と題する40ページあまりの章があり、『青春』以後のグリーンを知るうえで貴重な資料であるが、内容はかなりの部分、新版『アドリエヌ・ムジュラ』、『レヴィアタン』、『もうひとつの眠り』の序文と重なる。以後、「青春の終り」からの引用は《Points》叢書のページ数。

- (14) 彼には小説 *Le Feu sacré* のほか、*La Vraie révolution de Roosevelt* や *Journal d'un journaliste* の著作があり、グリーンについて *Julien Green par lui-même* も書いている。
- (15) Paul Claudel et André Gide: *Correspondance 1899-1926*, 邦訳『愛と信仰について』p. 255。またこの文章は Dominique Fernandez: *L'Étoile rose*, 邦訳『薔薇色の星』p. 325 にも引用されている。
- (16) 上総英郎「ジュリアン・グリーン論」(『虚空のうちなる本性』p. 159)。
- (17) D. J. ウェスト (村上・高橋訳)『同性愛』p. 197。
- (18) Julien Green et Jacques Maritain: *Une Grande amitié: Correspondance 1926-1972*, p. 200. 1970年7月24日付の手紙。
- (19) 同上書, p. 49. 1928年1月11日付の手紙。
- (20) これまで未発表であった、各時期にわたる短編小説の多くが、1984年 *Histoires de vertige* として発表された。未完成のもの、みじかい断片にすぎないものなど内容はさまざまだけれど、グリーンが早くから創作に力を入れていたことをしのばせ、なかには《Le rêve de l'assassin》(1923) のようにのちにはみられない傾向の作品も含まれていて興味ぶかい。
- (21) 現行の『日記』は1926年4月9日を最初の日付とし、同年10月13日まで書きつづけられたあといったん中断、28年9月17日からは、多少の不規則さを伴いながら今日までつづいている。
- (22) ほとんど同じいい方が、新版『アドリエヌ・ムジュラ』序文 p. 14 にみられる。
- (23) 64-3-24は、この事件があった年を1926年とする。『アドリエヌ』執筆の時期からみて、この方が正しいように思われる。
- (24) 前掲のグリーン=マリタン往復書簡, p. 118. 1960年3月18日付の手紙。
- (25) この部分は、『モン・シネール』が出版の際の事情で若干削除されたなかにはいっている。プレヤード版全集においてはじめて、無削除版が世に出た。
- (26) この種の発言は、グリーンにおいてひんぱんである。54-8-27の個所に、プレヤード版全集の編者 Jacques Petit がつけた注を参照のこと。

〔付記〕 引用文の翻訳にあたって、グリーン作品で既訳のあるものは参考にさせていただいた。